『キャリー』におけるテレキネシスの脅威

宮　内　妃　奈

「福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要」第五十八号抜刷

2022（令和４）年３月

『キャリー』におけるテレキネシスの脅威

宮　内　妃　奈

20 世紀は世界がイデオロギー闘争に直面した時代であった。特に 1940 年代後半から 80 年代後半を共産主義と自由主義の戦いとして捉えるなら、Stephen King はまさにその時代を生き、“the nihilist moment of disillusionment and anger”（「幻滅と怒りに満ちた虚無的な時期」）と Yuval Noah Harari が呼ぶ 21 世紀現代において[1]、未だ圧倒的な勢いで作品を発表している作家である。彼の最初の作品が世に出たのは 1970 年代であるが、これまでに書かれた書籍は優に 70 作を超え、ほとんどの作品が映画やドラマとして映像化されている。デビュー作 *Carrie*（1974,『キャリー』）は 70 年代のオカルト・ブームに乗り、映画の成功も後押ししてペーパーバック版が大ベストセラーとなった。その後、*Salem's Lot*（1975）、*The Shinning*（1977）、*Pet Sematary*（1983）、*It*（1986）と続々と話題作を発表し、モダン・ホラーの旗手としてその名を轟かせ、90 年代以降は超常現象、幽霊、化け物といったキングが得意とするモチーフだけでなく、老い、ジェンダー、DV、人種といった現代の社会問題を扱うなど、一躍 20 世紀を代表するアメリカ作家の一人に昇りつめている。1999 年の事故によりキングの執筆活動の継続が危ぶまれた時期もあったが、21 世紀に入った 2003 年に全米図書賞の特別功労賞を受賞したことは、キングがエンターテインメントの世界だけでなく、アメリカ（純）文学の世界にも認められた瞬間であった。[2] 彼の制作に対する熱意は今も衰えを知らない。2021 年には長編 2 作を発表、2022 年についても既に、最新作が発売されたばかりだ。

『キャリー』以降、アメリカの大衆小説家として活躍するキングであるが、彼が成功した秘訣は、ホラーというジャンルで単に時流に乗り運に恵まれただけではない、独自の確立された世界観、作家としての力量、そして努力に

あると風間は指摘する。新潮文庫版『キャリー』の解説において彼は、「現代の語り部、物語を紡ぐ天才と称されることのあるキングだが、実はよく読みよく書くということを続けている努力の人なのだ」[3] と述べている。キングは幼い頃からホラー小説やコミックに触れ、兄が作成していた地元紙に携わるなど、作家を夢見て「書くこと」に多くの時間を費やしてきた。[4] キングの「ストーリーテリング」の巧みさは、人間の内なる闇を緻密に表現し、マルチなキャラクターを造形するだけでなく、そのどれもがリアルであること、そして、「恐怖（terror, horror, gross-out）」を創作の核としつつ、オカルト、SF、おとぎ話、ミステリー、サスペンス、ラブ・ロマンス、冒険小説、などの様々なジャンルをブレンドして読者を魅了する点にある。単なる「ホラー小説」という範疇だけでは到底語れない、人間のドラマが彼の作品には存在する。巧みに描かれた人物たちは、読者にとって自分たちと同じように様々な問題に悩み苦しむ人々であり、その多くは社会の弱者であり、はみ出し者（アウトサイダー）である。それらがキングワールドの核を成している。

小説や映画が扱う「恐怖」は心理的なものと社会的なものに大別されるが（池田、133）、キング作品についても気持ち悪い、あるいは背筋の凍る情感的恐怖に加え、その時代の社会騒乱に対する不安や恐怖がメタファーとなっている。実際、キングの『キャリー』であるが、キングは作品のインスピレーションを「地球征服のために宇宙からやってきた巨大な脳に取り憑かれて邪悪な超能力者になった男の悲劇を描いた」ホラー映画から得ているという（風間、71）。はるかに進歩した科学技術を持つ宇宙人、未知の存在が地球を滅ぼすというメタファーには、第二次世界大戦以降に世界が向かった核兵器や化学兵器開発などの熾烈な軍拡競争によって引き起こされた科学技術の発展による「破滅」への恐怖が表れている。まさに現代で言う AI による技術的破壊（“technological disruption”（Harari, 14））がそれにあたるが、科学技術の進歩は、人間に便利さや強さを与えると同時に自らを脅かす存在にもなる。一瞬ですべての命を奪う核兵器、「自然」な状態では生まれないものを作り出す「組み換え DNA」操作技術、クローン技術の進化、人口知能 AI の発展など、科学の発展は古典的な「神」の領域に達している。それをいか

に利用するのかという問題は、人間の未来のために、道義的、哲学的判断に委ねられている。キングの恐怖はまさに技術が生み出したもののグロテスクさと同時に、それに直面する「人間」の内面にある、と言っていいだろう。

本論では、デビュー作となる『キャリー』を取り上げ、人々を震撼させたキャリーの事件を「解釈」する様々な立場から、未知のもの、恐怖に対峙する人間の内面、実態、実像を考察する。それによってキングの世界観の一端を明らかにしてみたい。これまでの研究では、キャリーの初潮を軸に展開されるジェンダー論と母親との関係[5]、Reino, Yarbro や Strengell のように『シンデレラ』アナロジーから読むもの、が主流で、「テレキネシス」（超能力）を軸とするキャリーの物語を形作る断片的言説に焦点を当てたものはない。事件を振り返るものとしてテキストに挿入された物語は、当事の記録（新聞記事、手書きのノート、事件に対する証言記録）や事件後の社会の反応（雑誌のコラム、研究論文、手紙、書籍の引用など）であるが、そこには「超能力」という未知の力を、世間がどのように解釈し、対処するのかが表れている。この断片的物語には主に３つ、超能力自体を否定する立場、そして、超能力の存在を肯定した上で科学的に対処しようとする立場、そして、事件の当事者たちの記録が見て取れる。それらは物語世界の「未来」に備えるものであることは言うまでもないが、同時にそれは現実世界への提言にもなっている。

考察の前提として、物語におけるキャリーの曖昧性をもつ「テレキネシス」の存在保証について確認したい。冒頭でまず、「晴天から石が降った」という超常現象が「週刊新聞」で伝えられている。

> News item from the Westover（Me.）weekly *Enterprise*, August 19, 1966:
>
> RAIN OF STONES REPORTED
>
> It was reliably reported by several persons that a rain of stones fell from a clear blue sky on Carlin Street in the town of Chamberlain on August 17th. The stones fell principally on the home of Mrs. Margaret

White, damaging the roof extensively and ruining two gutters and a downspout valued at approximately $25. Mrs. White, a widow, lives with her three-year-old daughter, Carietta.

Mrs. White could not be reached for comment. [6]

オカルト雑誌であれば真偽の程度に曖昧性が保証されるが、「事実」が前提の新聞に相性のそぐわない内容があえて掲載されることで、ホワイト家に超自然現象が「起きた」可能性が高められている。そして新聞記事の「真偽」は、“What none of them knew, of course, was that Carrie White was telekinetic.”（４）とキャリエッタ（キャリ―）の力と結び付けられ、キャリーが３歳の時に屋根に「石を降らせた」という物語の前提条件が成立することになる。すなわち、テレキネシスは「存在する」。

１）権威者の物語

メイン州のチェンバレンでキャリーが起こした大惨劇について、州知事は、事件の全容を明らかにすべく委員会を招集する。その時の AP 電の表現は次の通りである。

INVESTIGATION CONCERNING CARIETTA WHITE AND SO-CALLED “TK” PHENOMENA CONTINUES AMID PERSISTENT RUMORS THAT AN AUTOPSY ON THE WHITE GIRL HAS UNCOVERED CERTAIN UNUSUAL FORMATIONS IN THE CEREBRUM AND CEREBELLUM OF THE BRAIN. THIS STATE'S GOVERNOR HAS APPOINTED A BLUE-RIBBON COMMITTEE TO STUDY THE ENTIRE TRAGEDY.（194）

キャリーとテレキネシス現象に対する好奇の目によって、キャリーの脳

細胞には奇妙な組織が検死結果で確認されたという噂が絶えず、知事は最高級の学識者委員会を設置して、事件の解明に当たらせる。通称 White Commission（ホワイト委員会）と呼ばれる調査委員会であるが、委員会は事件の再調査、生存者への尋問を行い、最終的な結果を出す。

> . . . and so we must conclude that, while an autopsy performed on the subject indicates some cellular changes which *may* indicate the presence of *some* paranormal power, we find no reason to believe that a recurrence is likely or even possible. . .（198–99）

キャリーの能力を示す根拠は否定できない「かもしれない」が、あると断定できるものでもなく、従って、再発の可能性はないというものである。この委員会の結果は、超能力を “a hoax and a fraud”（41）として捉え否定する大学の研究者や科学者たちによっても支持された。

キャリーの特殊な能力「テレキネシス」は、「根本主義派キリスト教」と相性がよくないと述べるのは、『キャリー』のセクシュアリティの問題をキリスト教の歴史的視点から論じた森本である。森本は、アメリカにおける魔女裁判や異端審問における女性への差別の歴史を紐解きながら、キャリーの母 Margaret の歪んだ宗教観による極端な女性性の否定とキャリーの存在が示す社会への反逆性について分析している。そもそもキリスト教の世界に「超心理学」の概念は相容れない。それは、人間の超能力は「神」の存在を揺るがしかねないものであるからだ。だとすれば、マーガレットにとってキャリーの力は「異教的」なものであり、キリスト教社会において超能力を持つキャリーという存在は認めがたい。さらに、アン・ハチンソンの異端裁判の歴史が示すように、人知を超えた能力を持つキャリーは社会を統率する立場の地位に固執している人々、権威主義者にとっても喜ばれる存在ではない。科学的にはキャリーのテレキネシスを認めれば「ニュートンの法則」といった科学的常識が覆されることを意味する。ハチンソンは何か能力が使えたわけではないが、宗教的指導者たちの知を脅かしたことで、理不尽な追放

を命じられた。キャリーの「能力」に対する解釈にも、アメリカの「隠匿」「否定」の歴史がオーバーラップする。テレキネシスを検証し否定する人々に冠された “renowned”（41）といった表現や一流大学の名は、逆説的に、社会で認知されている「権威」に対して疑問を投げかけるものとなっている。

2）科学者の物語

真っ向からテレキネシスを魔術だとして否定する研究者がいる一方で、それを科学的に追求しようとするグループもいる。その代表者の一人、McGuffin は、ホワイト委員会の最終報告書を「官僚主義的」だと非難し、キャリーの能力を否定するのは、科学者として “irresponsibility”（41）の結果であると言う。

> In conclusion, I would like to point out the grave risk authorities are taking by burying the Carrie White affair under the bureaucratic mat—and I am speaking specifically of the so-called White Commission. The desire among politicians to regard TK as a once-in-a-lifetime phenomenon seems very strong, and while this may be understandable it is not acceptable. The possibility of a recurrence, genetically speaking, is 99 per cent. It's time we planned now for what may be. . . .（197-98）

マクガッフィンの言葉を証明するかのように、断片的物語は 1979 年の事件から 9 年後に書かれた Amelia Jenks の、テレキネシスの能力を持つ娘が生まれたことを示す手紙で締めくくられている。彼のようにキャリーの事件を “once-in-a-lifetime phenomenon” ではないと信じる科学者たちは、テレキネシスの遺伝子を突き止め、その完全なる分離を目標とする。その代表として、バークレーの Bourke と Hannegan の論文 “A View Toward Isolation

of the TK Gene with Specific Recommendations for Control Parameters” が提案するのは、小学生を対象としたテストによる TK 遺伝子保持者の特定である。

> . . . when a testing procedure is established, all school-age children will undergo the test as routinely as they now undergo the TB skin-patch. (183)

ツベルクリンテストのように定期的に検査をするというものであるが、それでは、超能力の存在を認め、「遺伝子」の特定にたどり着いた科学者たちの次の一手は何か。科学の力で最終的に未知なる能力の根源を見つけても、それに対処するには「限界」が生じる。「もしも TK 検査が陽性だった場合、陽性者の頭に銃弾をぶち込むしか手立てはない。すべての壁を破壊させるほどの力を持つ人間を隔離するのは不可能ではないか。」(183) とトゥレーン大学の David R. Congress が疑問を呈するようにテレキネシスが人間の体の一部であるため、科学的研究を生かすには倫理的問題が関わるのである。

コングレスはキャリーのテレキネシス現象を最も冷静に、論理的に、科学的に、包括的に研究し、Susan Snell(スー)が “the only half-decent book”(64) として理解を示した唯一の本、*The Shadow Exploded: Documented Facts and Specific Conclusions Derived from the Case of Carietta White* を発表した研究者である。この書籍からの引用は、挿入されている断片的物語としては最も多く、キャリーの物語のメタストーリーを創出しているとも言える。

コングレスは、まず、キャリーの能力についてその存在の肯定、“a ‘TK’ potential of immense magnitude existed within Carrie White.’（６）として議論を始める。彼は様々な研究から、キャリーの TK 遺伝子は父が保有者で母方の祖母から引き継がれた遺伝子との結合であること、キャリーのテレキネシス発動の条件として「心理的」「肉体的」要素があり、極度のストレス下において精神が抑圧された時に生じると論じる。そして、キャリーが３歳の時の石の事件は母の狂信的とも言える根本主義派キリスト教信仰の押し

つけによるもの、それ以降のシャワールームとプロム事件は、初潮による身体的変化と共にキャリーの中で眠っていた能力が呼び起こされ、同級生から受けた揶揄と恥辱によってキャリーの「罪」の意識と心理的ストレスが最大化し爆発したものであるとする。彼はキャリーの物語を再構築するにあたって、研究者のみならず、事件生存者の話を聞き、時に "hardly the most scholarly or unimpeachable source"（52）な *Life* 誌に掲載された別のテレキネシスの能力者の報告記事さえも参考にする。このようなコングレスの研究姿勢における妥当性は、プロム事件のカギとなる Thomas Everette Ross（トミー）の役割に与えられた見解に証明される。コングレスは、キャリーを貶めようと首謀した Chris Hargensen（クリス）の共犯者としてトミーに罪を着せようとするハーバード大学の George Jerome の *Atlantic Monthly* への寄稿に反論する。その根拠は、トミーの学校での成績、野球の実力、そして、生存者からのコメントによるもので、ジェロームが主張する "practical joker"（71）とは程遠いロスの "an extraordinary young man"（72）の人物像を提示する。ジェロームの主張が、キャリーの人物像を無視して TK 能力のみに拘る評論家と同一である一方で、コングレスは、トミーの人物像を客観的に調査し、同様に、キャリーについても、彼女のセンセーショナルな能力だけでなく、人物像、人間関係を詳細に調べ、テレキネシスの煽情性に踊らされない包括的な物語を生み出している。

しかし、科学的、心理学的に広範に渡って分析した彼でさえ、未来への提言は限界に直面する。彼の見解は先に述べた通りであるが、果たして TK テストが有効であるのか、テストすること自体は "is forewarned forearmed?" と自問し絶望する。

> And even if isolation could be made successful, would the American people allow a small, pretty girl-child to be ripped away from her parents . . . I doubt it. Especially when the White Commission has worked so hard to convince the public that the nightmare in Chamberlain was a complete fluke.

Indeed, we seem to have returned to Square One. . . (183)

科学的に処理方法がわかっても、テレキネシスを持つ「人間」をコントロールすることは、自由主義のアメリカにおいてできない。このコングレスの結論、「振出しに戻る」は作品の恐怖の一端を担っている。

3）当事者の声の残骸

ホワイト委員会によってキャリーと共謀したのではないかという嫌疑をかけられ、社会から非難の眼差しで見られスケープゴートとなったスーザン・スネルの手記は、キャリーの事件を研究者ではない当事者の視線で語る貴重な物語となる。それは、専らキャリーの「人格」を取り戻そうとする試みであり社会への抗議であった。事件によってキャリーのテレキネシスのみが大きく注目され、マスコミによってキャリーは “some kind of a symbol”（109）化され、映画化によって商品化される。スーの手記が強調するのは、キャリーも自分も（トミーも）17 歳の子供であったこと、自分と同じようにキャリーは “hopes and dreams”（109）を持つ少女であり「人間」であったことである。そして、物事の本質が経済消費社会、情報化社会の中で歪められ損なわれていくことへの不安と、その圧倒的な力への嫌悪、権威主義的な社会の中で孤独な戦いを強いられることへの恐怖が、スーの物語から読み取れる。

同様に、キャリーが残したものは僅かしかないが、母に禁止されながらこっそり聞いたロックミュージックの歌詞の一部や、キャリーが国語の時間に残した短詩には、彼女が抱える「孤独」が表れている。

Jesus watches from the wall,
But his face is cold as stone,
And if he loves me

As she tells me
Why do I feel so all alone?（58）

詩に描かれている「壁から見下ろすキリスト」は、家に飾られた数々のキリスト像にほかならず、狂信的な強権的な母の教えへの疑問であり、孤独な心の叫びとなっている。

4）隠され、表に現れない物語

ホワイト委員会のように権力は時に都合の悪いことに蓋をし、無きものにしようとする。科学は、あくなき人間の進歩志向によってその威力を発揮している。その決定的な力の下で、弱き者の声は届かず犠牲となり、問題は放置されたままとなる。現代社会において、犠牲になるのはAI、アルゴリズムに牛耳られる（かもしれない）人間であり、進歩という名の下に破壊され続ける環境である。『キャリー』の「超能力」に対峙する社会は、現代が未知の脅威に立ち向かう姿と何ら変わらない。キャリーはおとぎ話のシンデレラのようにハッピーエンドを迎えられず、チェンバレンの町は回復の兆しのない廃墟と化した。この「未来のない結末」は、積極的「前進」と「成功」を前提とした世界観への圧倒的否定として現代への提言となる。『キャリー』における断片的物語が社会の権威、科学の声であるとすれば、キャリーとマーガレットの物語は、弱き者、犠牲者のそれであるだろう。それは「テレキネシス」を持つ子とそれに対峙する母の姿であり、社会の表には現れてこない目に見えない本質を保有している。

キャリーの母マーガレットは、狂信的で暴力的に娘を支配する強権的な母である。彼女は、出産の際に肉切り包丁で自らへその緒を切断し、血の海の中で子どもを産んだ。手にした血に染まる包丁（剣）は、グレートマザーの恐母のアナロジーを思わせる。マーガレットは根本主義派キリスト教徒として、教会には通わず、自宅の「礼拝室」で自らが牧師となり、キャリーを信

者にして祈りを捧げる。女性的であるもの、性に関わるもの一切を邪悪なものとして退け、キャリーの「女性」としての成長を妨げる。その結果、キャリーは16歳になるまで「月経」という現象を知らずに育てられた。さらに、彼女はキャリーの社会生活における「世俗性」「協調性」を阻害する。キャリーは「いつも汗の匂いをさせて」（7）不器用に仲間を追いかけ、「膝が隠れる長さの1958年（約20年前）に流行ったAラインの奇妙で不格好な」(68)古ぼけたスカート、「いつも伝線した、あるいは伝線しかけたストッキング」（8）、そして、「腋の下に汗滲みのついたブラウス」（8）を着ている。キャリーはそれが決して魅力的ではないことを知っているが、他の同級生と同じように、若者雑誌『セブンティーン』に載っているおしゃれな “short kicky skirts, pantyhose, and frilly underwear with patterns on them”（33）をマーガレットは許さない。「49セントの指輪」(47) すら買い与えない。キャリーを一切の商業的世俗性、社会的属性から「暴力」で引き離す。マーガレットにとってキャリーの「女性」としての魅力は社会から隠さねばならず、キャリーが少しでも興味を示せば礼拝室奥のクローゼットに閉じ込め、力で封印してきた。キャリーの周りには、世間との境界となる “the redplague circle”（18）が刻み込まれている。これは社会からキャリーを隔離する母の狂信的異質性を示すものであるが、なぜこれほどキャリーは社会と隔絶させられねばならないのか。それは単に母の狂信性だけではない、「魔除けの円」、すなわち彼女のテレキネシスの力を封じ込める境界でもあるのではないか。

マーガレットの祖母は「テレキネシス」の能力保持者であった。マーガレットの記憶には、祖母の邪悪な姿が刻み込まれている。

> Oh, she [Margaret] knew the Devil's Power. Her own grandmother had it. She had been able to light the fireplace without even stirring from her rocker by the window. It made her eyes glow with
>
> （thou shalt not suffer a witch to live）
>
> a kind of witch's light. And sometimes, at the supper table the sugar bowl would whirl madly like a dervish. Whenever it happened, Gram

> would cackle crazily and drool and make the sign of the Evil Eye all around her.（120）

「まるで托鉢僧が揺れるかのように砂糖瓶がゆらゆらぐるぐる回り出し」、祖母は「涎をたらし、狂ったかのような甲高い笑い声をたてて、邪悪な目つきをしている」。TK 遺伝子が女性にのみ優性のものであると科学が実証するまでもなく、マーガレットの母方の系譜において、この「魔女」の記憶は語られ、受け継がれているはずである。ホワイト家と同様に生まれたばかりの娘のテレキネシスの能力を目にしたアメリアは、同じ力を持っていた祖母の記憶を姉妹のサンドラと分かち合っている。マーガレットもマーガレットの母も祖母の記憶を受け継ぎ、能力者を生む可能性を意識していたとすれば、マーガレットの異常なまでの女性性の嫌悪と否定、宗教への依存は当然であるのかもしれない。信仰が深ければ深いほど、「魔女の力」としてのテレキネシスへの恐怖、嫌悪はマーガレットを強烈に苛み、自らの「女性性」の否定、性的な行為の排除へと結びつくだろう。そして、一度、流産を経験しながらも自分の妊娠・出産を「がん」にかかったのだと思い込もうとしたように、殺すことができなかった娘キャリーの女性性を否定し続けようとした背景には、テレキネシスの能力への恐怖が存在したのではないだろうか。それとも、従来のマーガレットに対する批評（Strengell, Hanson）が示すように、単に性格異常なだけなのか。いずれにせよ、キャリーは初潮を迎え、身体的女性性を獲得する。

このような強権的で、暴力的なマーガレットにも「良母」としての側面があるのか。キャリーの不格好な身なりの下には健康的な体が隠されている。プロムに誘ったトミーの視線の先には、キャリーの白い歯、太過ぎない整った足、「不快感を与えない顔つき」（68）があった。ホワイト家の家の中は “Cleanliness is next to Godliness”（32）として、きれいに磨きこまれた浴室が証明するように、清潔に保たれており、キャリーが口にするものは、“homemade”（75）のパイである。*The Science of Stephen King* は、“religion is linked to better overall health and well-being.”（7）と、宗教が子供にとっ

て常にマイナスに作用するわけではなく、宗教による権威主義的な躾、罰、強制力が問題なのだというが、それはある程度、キャリーとマーガレットの関係にも当てはまっている。さらに、キャリーは裁縫の技術を身に付けている。それは母によって授けられたものであり、その腕前は経済的に自らを養うことができるものである。キャリーは確かにマーガレットによって、健康的に、技術を身に付けた「人間」として育てられている。

それではマーガレットに対するキャリーの認識はいかなるものであるのか。キャリーにとっては、母はグレートマザー、「赤い魔除けの輪」が象徴する「束縛」「禁止」の恐母と「安心」「理解」「不変」の良母の両義性を持つ。

キャリーは小学校時代に母の反対を押し切りクリスチャン・ユース・キャンプに参加する。結局、子供たちのいじめに遭い、予定よりも一週間も早く家に帰る羽目になる。泣きはらした顔のキャリーを迎えに来たマーガレットは言う。「赤い魔除けの輪」の中にのみ希望と安全があるのだと。

> . . . Momma had told her grimly that she should treasure the memory of her scourging as proof that Momma knew, that Momma was right, that the only hope of safety and salvation was inside the red circle."(19)

母への両義的感情は、トミーに誘われ、プロムに行くことを決心した時をピークに表れる。キャリーの心は、揺れ動く。

> Of course it would be easier to stay here with Momma. Safer. She knew what They thought of Momma. Well, maybe Momma was a fanatic, a freak, but at least she was predictable. The house was predictable. She never came home to laughing, shrieking girls who threw things. (101)

確かに母に守られた世界は、「安心」であり、「予測可能な」場所である。しかし、安全ではあっても、そこにはキャリーが本来の意味で生きている実感

はない。彼女は家にいても「ひどく惨めな空っぽなうんざりした気分になり、その心に空いた穴を塞ぐ」(33) 必要があった。その唯一の方法は、食べることだった。そして、考える。

> She [Carrie herself] could be
> (what o what o what)
> could stop the chocolates and her pimples would go down. They always did. She could fix her hair. Buy pantyhose and blue and green tights. Make little skirts and dressed from Butterick and Simplicity patterns. The price of a bus ticket, a train ticket. She could be, could be, could *be*—
> *Alive*. (33)

母の禁止するおしゃれをし、バスや電車に乗って好きなところに行くことができれば、「生きられる」。空虚な母との世界は、安全ではあるが、卒業後もそこに残れば、自分の可能性を奪い、さらには、希望と「思考力」を失うことを意味するものであった。

> High school would be over in a month. Then what? A creeping, subterranean existence in this house, supported by Momma, watching game shows and soap operas all day on television at Mrs. Garrison's house when she had Carrie In To Visit (Mrs. Garrison was eighty-six), walking down to the Center to get a malted, after supper at the Kelly Fruit when it was deserted, getting fatter, losing hope, losing even the power to think? (101)

そして、キャリーは母からの完全なる「独立」を選択する。それは、ドレスを身に付け、男性と社会の輪、パーティへ出かけていくという、母が否定した「女性性」の解放による独立、「赤い輪」を消し去る決断であった。まさ

にそれは、マーガレットにとって性的堕落を意味し、神の赦しはもはや得られず、テレキネシス（悪魔の力）の封印が解けることを意味する。

最後に悪鬼、狂女として有名なマーガレットであるが、彼女のキャリーへの「愛」の片鱗を読み解いてみたい。マーガレットは何度もキャリーを殺害しようとした。キャリーの出生時、石を降らせた時、そして、能力保持者であった祖母の葬式から１か月後、キャリーが１歳を迎える前にミルク瓶を空中に浮かべた時である。しかしすべて実行に移すことができなかった。代償として、キャリーの女性性を抑圧し神に仕えさせたが、娘は「堕落」し「悪魔の力」は宿ってしまった。悪魔祓いの祈祷もしたが、キャリーは母の隔離を解きプロムに参加してしまった。最終的に残された方法は、自らの手で「悪魔の力」を始末することである。マーガレットは、次のように自問する。

> The only way to kill sin, true black sin, was to drown it in the blood of
> (she must be sacrificed)
> a repentant heart. Surely God understood that, and had laid His finger upon her. Had not God Himself commanded Abraham to take his son Isaac up upon the mountain? (121)

何度もキャリーを殺そうとしてできなかった自らの心を奮い立たせるかのように、彼女は自らを、神にイサクを捧げるアブラハムに譬えている。イサクはアブラハムにとって奇跡の息子であり、何にも代えがたい存在である。それを自らの境地と比較することは、例え歪んだものであったとしても、マーガレットのキャリーへの愛を示唆するものなのではないか。そして、マーガレットは、出産時と同じように包丁を片手に、キャリーが戻るのを待つ。子供の終わり（「死」）を司る恐母として。

コングレスにも測り知れなかったのは全てを破壊してしまった後の娘と母の関係である。

> And there is, of course, the knowledge that Carrie went home on Prom Night. Why? It is hard to tell just how sane Carrie's motives were by that time. She may have gone for absolution and forgiveness, or she may have gone for the express purpose of committing matricide. In any event, the physical evidence seems to indicate that Margaret White was waiting for her. . . . (120)

母と娘にしかわからない結びつきが確かにあった。

結

キャリーのテレキネシスは別の形で生まれ変わり、新たな悲劇が予兆されている。しかし、科学による答えは見つかっていない。キャリーとマーガレットが頼る社会はどこにもなかったように、その後の社会にも信頼や希望は見いだせない。宗教も救いとなっていない。スーは残りの人生を "long tunnel into blackness" (198) に譬えている。娘の手による母の死と母の赦しを求めて後を追う娘の死は、悲劇中の悲劇であるが、人間はただ自分たちの置かれた環境、世界で、悩みながら対処し、救済なく耐える小さな存在でしかないのか。キング世界が暗示する未来は、闇に包まれている。

注

1 Harari, Yuval Noah, p27. ハラリは 20 世紀から 21 世紀のイデオロギー闘争について、"In 1939 humans were offered three global stories (fascism, communism, liberalism) to choose from, in 1969 just two, in 1999 a single story seemed to prevail; in 2019 we are down to zero." (14) と現在は、自由主義が危機に陥り、頼るべきものが保証されていない時代であると警鐘を鳴らしている。

2 2017 年 11 月号の『ユリイカ』ではスティーヴン・キングの特集が組まれている。その中で諏訪部の「恐怖の起源に向かって」は、大衆小説家キングの初期作品の恐怖についてアメリカ純文学のゴシック文学の側面から歴史的な位置付けを考察する（試み

る）興味深いものである。

3 『キャリー』、p374。日本においてスティーヴン・キング研究の第一人者と言えば、風間賢二であるだろう。幻想文学研究家であり翻訳家である風間が 2021 年に出版した『スティーヴン・キング論集成』は日本で唯一のキングの本格的な研究本である。

4 *On Writing* の中でキングは、最初に物語を書いたのは母の勧めによるもので、6 歳の時に書いた「ウサギ」を題材にした 4 ページほどの物語であったことを明かしている。その後、キングは兄の新聞や高校の学校新聞の編集長をするなど書くことに拘り、『キャリー』以前には既に 3 冊の長編（*Rage*, *The Long Walk*, *The Running Man*）を創作していたという。（キングの大学教授 Burton Hatlen によると『キャリー』はキングの 6 作目になるらしい。）（*SKC*, 115）。作家として必要な資質として、キングは “read a lot and write a lot”（145）と述べ、自らの「仕事虫」としての書く姿勢を露にしている。“The truth is that when I'm writing, I write every day, workaholic dweeb or not. That *includes* Christmas, the Fourth, and my birthday（at my age you try to ignore your goddam birthday anyway）. And when I'm not working, I'm not working at all, although during those periods of full stop I usually feel at loose ends with myself and have trouble sleeping.（153）

5 Meg Hafdahl and Kelly Florence は女性の月経の歴史的受容から、Hanson、風間はクリスティヴァのアブジェクションの概念を用いて考察している。Weller はエーリッヒ・ノイマンの「グレートマザー」の理論を援用してキャリーとキャリーを取り巻くスーザン・スネル、ミス・デジャルダン、クリス・ハーゲンセンの女性像に迫っている。Byal はキャリーを取り巻く女性たちの関係から、キャリーの女性性の受容と主体性の葛藤がモンスター性を生んだ可能性について考察している。

6 *Carrie*, p3. これ以降の本論における引用はこの版からであり、ページ数のみを示す。

参考文献

Byal, Kellye. “Female Subjectivity in *Carrie*.” Ed. Jacob M. Held. *Stephen King and Philosophy*. Lanham: Rowman and Littlefield, 2016. 35–45.

Beahm, George. *The Stephen King Companion: Four Decades of Fear from the Master of Horror*.（*SKC*）New York: St. Martin's, 2015.

Hafdahl, Meg and Kelly Florence. *The Science of Stephen King: The Truth behind Pennywise, Jack Torrance, Carrie, Cujo, and More Iconic Characters from the Master of Horror*. New York: Skyhorse Publishing, 2020.

Hanson, Clare. “Stephen King: Power of Horror.” Ed. Brian Docherty. *American Horror Fiction: From Brockden Brown to Stephen King*. London: Macmillan, 1990. 135–154.

Harari, Yuval Noah. *21 Lessons for the 21st Century*. London: Vintage, 2019.

King, Stephen. *Carrie*. New York: Doubleday, 1974.

—*On Writing: A Memoir of the Craft*. New York: Scribner, 2000.

Reino, Joseph. *Stephen King: The First Decade: Carrie to Pet Sematary*. Boston: Twayn, 1988.

Strengell, Heidi. *Dissecting Stephen King: From the Gothic to Literary Naturalism*. Madison: U of Wisconsin P, 2005.

Weller, Greg. "The Masks of the Goddess: The Unfolding of the Female Archetype in Stephen King's *Carrie*." Ed. Tony Magistrale. *The Dark Descent: Essays Defining Stephen King's Horrorscape*. Westport: Greenwood, 1992. 5-17.

Yarbro, Chelsea Quinn. "Cinderella's Revenge: Twists on Fairy Tale and Mythic Themes in the Work of Stephen King." Ed. Harold Bloom. *Stephen King*. Philadelphia: Chelsea House, 1998. 5-13.

池田純一 「ゾンビから遠く離れて―古典になった怪異の王」『ユリイカ：詩と批評』、第 49 巻第 19 号、青土社、2017 年。p131-142。

風間賢二 『スティーヴン・キング論集成―アメリカの悪夢と超現実的光景』 青土社、2021 年。

キング、スティーヴン 永井淳訳 『キャリー』（2013 年） 新潮社、2019 年。

諏訪部浩一 「恐怖の起源に向かって―スティーヴン・キングの初期作品」『ユリイカ：詩と批評』、第 49 巻第 19 号、青土社、2017 年。p52-59。

森本あんり 「『キャリー』にみるアメリカ的キリスト教の特異性」『Kotoba』 第 40 号、集英社、2020 年。p80-85。